

二〇一六年度

帰国生入学試験

## 【基礎学力検査】

### 「国語」問題

1. 問題および解答用紙は試験開始の合図があるまで開かないでください。
2. 解答はすべて解答用紙の所定の欄に記入してください。
3. 受験番号および氏名は解答用紙の所定の欄に記入してください。
4. 試験終了後、解答用紙を問題の上にふせて置いてください。
5. 回収するのは解答用紙だけです。問題は持ち帰ってください。
6. 「国語」の問題は1ページから6ページまでです。

1 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

- 1 「ことばは人に伝わるか」というのが、今日の集まりのために、私自身がえらんだ題ですが、こういう、自分で自分の首をしめるような題で話し出そうとすること自体が、すでに矛盾<sup>(1)</sup>であり、しかも不遜<sup>ふそん</sup>であることは、私自身いちばんよく知っているつもりです。私がここで話すことばが、あなた方、またはあなた方のなかの一人に果して伝わるか、というたがいから私の話を始めるということ、しかもそれを主題とするということは、最初からピントの外れた話だと思われるかもしれません。私自身もそう思います。
- 2 ただ、そういつてしまつては、いつまでも話が始まることにはなりませんから、私のことばは一応はあなた方に伝わるのだという、あぶなっかしい妥協をしたうえで、今日の話を始めるわけです。
- 3 といいますのは、ことばというものは、それが出発するとき、口をついて出る瞬間からすでに不安なものであり、あぶなっかしいものであるということが、私たちの対話の、のがれがたい前提であり、私たちは、まず最初にこのような妥協をして、はじめて対話というものがその一歩をふみ出す、と思うからです。
- 4 私たちの生活や行動の初めには、いつも、このような重大な妥協があります。私たちが人間として、まったく切りはなされた存在でありながら、なお共同で生きて行けるのは、その最初に、この重大な妥協があるからだと思ひます。
- 5 たぶん、人間以外の動物と人間が区別されるのは、このような妥協によつて、人間の集団が存立していることだと思ひます。人間は妥協することのできる唯一の生物です。動物は妥協しません。そこには強者と弱者の二つがあるだけです。なぜ人間だけが妥協するのか。それは、人間がことばをもっているからだと思ひます。
- 6 妥協ということばは、あるいは適当ではないかもしれませんが。それなら、「仮定」ということばにいいかえてもいいと思ひます。私がいまここで、私が考えたこと、考えていること、考えるであろうことを、語りつづけて行くためには、ともかくも、私自身のことばがあなた方、もつと正確には、あなた方のなかの一人に伝わるのだという仮定が、その初めになければならないからです。
- 7 この仮定はたぶん、幾何学でいうユークリッドの「公理」<sup>\*1</sup>のようなものであろうと思ひます。ユークリッド幾何学が発し、展開するためには、最小限この公理を無条件で「承認」しなければならぬ。公理が कारण<sup>原因</sup>として承認されることによつて、はじめてその上に、もろもろの定理が証明され、積みあげられて行くわけです。
- 8 これらの定理は、いずれも厳密な証明によつて成立するわけですが、それらの証明は、「公理」を承認することによって成立しているわけです。承認は証明ではありません。それは約

束ごとです。つまり、うたがいだしたら、その先一步も進めないから、最小限これだけの公理はうたがう余地のないものとして、先へ行こうではないかというのが「承認」です。

9 妥協ということばが I にかわり、そして II ということになったわけですが、この三つの定義の段階をたどるあいだにも、すでにいくつかの妥協をしているわけです。妥協ということが、ことばの重要な属性であることは、このことからおわかりいただけるかと思います。

10 したがって、ユークリッド幾何学をまなぶものは、まず公理の正否に目をつぶらなければならぬ。同時に、公理そのものをうたがう自由もそこでホリユウ<sup>A</sup>されるわけです。もしうたがうならユークリッド幾何学の全体系はその場で崩壊するわけです。

11 「ことばは人に伝わるか」というヤツカイ<sup>B</sup>なこの主題は、「ことばが伝わることを疑うわけには行かない」とか、「ともかくもことばは伝わっているではないか」という重大な妥協、または承認によって、いわば見切り発車のかたちで、やっとその先へ進むわけです。

12 だが、証明はできないが、承認しようではないかという立場は、けっしてあやふやな、いかげんなものではありません。ことばは、私たちの生活の細胞であり、証明の必要なしにすでにうごいているからです。証明とはたぶん、いきなりとび出したことばを、大へんのろいもう一つのことばがあわてて追いかけて、やっとのことで、なだめてつれもどすということではないかと、私は思います。

13 ことばはいわば既成事実であり、私たちはいつもことばに対して事後承諾を要求されるというかたちで、対話というものが成立している。それが、ことばが担<sup>C</sup>う宿命だと私は思います。

14 大へんごたごたした説明になりましたが、ことばをことばで語ろうとするなら、結局はこの混乱に進んでまきこまれないわけには行かない。結局、私たちはここで、ことばを信じながらうたがいぬく、というさいごの立場におかれるわけであり、そのような III によって、私たちの言語生活が成立しているわけです。これを矛盾だといってしまえば、かんたんです。だが私たちの生活は、そんなわがりのいいものではありません。私たちは、ことばをうたがいながら、なおかつ信じて行くという必死な立場をとらざるをえない。

15 すべてがそうであります。およそ信ずるに値しないもの。それをしも信じなくては、一日一日の生活が成り立たないわけです。妥協が必要なゆえんです。

(石原吉郎『海を流れる河』より)

※1 ユークリッドの「公理」：ユークリッドは、古代ギリシアの数学者。

「公理」は数学において、自明の真理としてみなされているもの。

問1 〜〜線部A、Cのカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで記しなさい。

問2 ——線部(1)「矛盾」とありますが、何が矛盾しているのですか。次の選択肢の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 自分ことばが伝わらないかもしれないというたがいながら、ことばによって自分の考えを人に伝えようとしていること

イ 自分で自分の首をしめるような題で話すことを、自分自身がいちばんよく知っていること

ウ 「ことばは人に伝わるか」という「人」全体にかかわる題なのに、「あなた方のなかの一人」に自分の話が伝わるかどうかという話になってしまっていること

エ ことばについての話をしなくてはいけないはずなのに、そのテーマからヒントの外れた話をしようとしていること

問3 ——線部(2)「重大な妥協」とありますが、なぜ「妥協」が「重大」な意味を持つのですか。その理由として適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 妥協こそが、人間以外の動物と人間を区別するものであるから

イ 妥協によって、人間は集団生活を営むことができるようになるから

ウ 妥協によって、人間はことばを持つことができるようになったから

エ 妥協こそが、ものごとを先へ進め、様々な定理を積みあげる基盤となるから

問4 

I	II
---	----

にあてはまるものとして最も適当な組み合わせを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア I 仮定 II 証明

イ I 公理 II 定理

ウ I 仮定 II 承認

エ I 公理 II 余地

問5

III

には四字熟語が入ります。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 二者択一
- イ 二人三脚
- ウ 二束三文
- エ 二律背反

問6

本文における各段落の説明として、正しくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア [4]～[5]段落では、今までの「ことば」についての議論を受け、その議論が私たちの「生活や行動」にも通用するものであると一般化している。
- イ [6]段落では、[4]～[5]段落における「妥協」についての議論を否定し、それに対する新しい概念を提出している。
- ウ [7]～[8]段落では、ユークリッド幾何学の「公理」を、今までの「ことば」に関する論を説明するための比喻として挙げている。
- エ [12]～[13]段落では、「ことばは人に伝わるか」という主題を受けた上で、現実におけることばのうごきへと、さらに論を展開している。

2

次の文章を①～③の条件にしたがって、八十字以上百字以内で要約しなさい。

- ① 三文で要約すること
- ② 第二文の書き出しを「しかし」、第三文の書き出しを「つまり」で始めること  
(……………。しかし……………。つまり……………)。
- ③ 解答欄の一マス目から書き始め、句読点も一字に数えること

私たちは、日常的に「ストレス」という言葉を使っている。「ストレスがかかっている」とか「ストレスがたまってきたね」などと言う。

「ストレス」を簡単に言うと、外部からの刺激を受けたときに生じる心身のゆがみ、ということになる。外部からの刺激とは、対人関係・睡眠不足・騒音：などさまざまなものが挙げられる。

この「ストレス」は二〇世紀になって急速に広まった概念だが、それ以前の人たちにストレスがなかったのかというと、そうではない。たとえばビクトリア朝時代の女性たちはヒステリーをよく起こしたといわれるように、かなり社会的な抑圧があったわけだ。あるいは江戸時代の武士社会は、身分制度がきつく、時には切腹しなければならぬところまで追いつめられるのだから、現代から見れば、超ストレス社会だったかもしれない。だがそれらの時代はストレスとはいわなかった。そういう言葉、そういう概念がなかったからである。

現代に生きる私たちは、「ストレス」という概念があるおかげで、心や体に生じた、なんとなく嫌な状態を的確に認識できるのだ。漠然としていたものが「ストレス」という言葉で表されると、「ああ、わかる、わかる」となって、クリアに見えてくるのだ。概念化していくことで、違和感のあるものが「ああ、これなんだ」とわかってくる。私たちは、あらゆる事象を言葉で表現することで、ものが見えていることになる。

その反面、私たちは「ストレス」という言葉でなんでも簡単に括くくってしまうことにより、それ以外の事象を見逃してしまっていることもある。あらゆる苦痛な状態を「ストレスだね」と一言で片付けてしまう。その行為は、実はもつと的確な表現があるかもしれない。もつといい表現がないか模索することを放棄することになっているのだ。的確な表現を探す行為を放棄することは、ものごとをより確かに捉とらえる機会を失うことにつながる。私たちは言葉に縛られ、しばしば思考を停止させているとも言える。

言葉は私たちにとって、このように便利なものにも窮屈なものにもなるのだ。

(本文を作成するにあたり、齋藤孝『アイディアを10倍生む考える力』を参考にした)



